

# 群馬県内における明治前期の陶磁器

## — 石神遺跡「攬乱」出土資料 —

大 西 雅 広

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

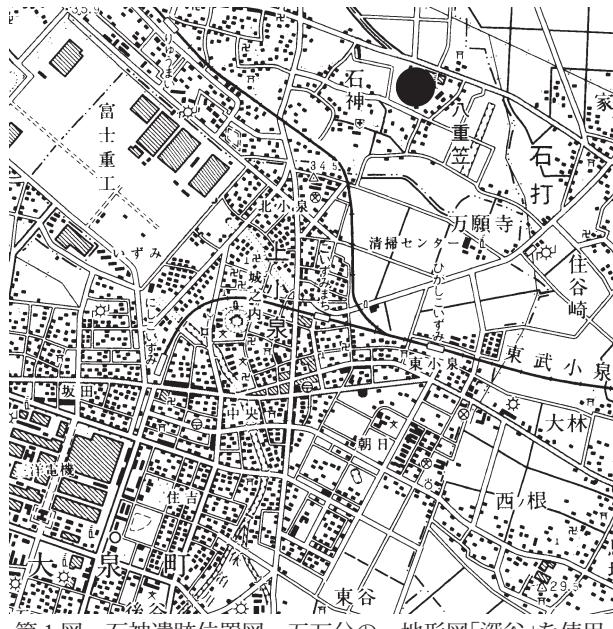
- |                         |          |
|-------------------------|----------|
| 1. はじめに                 | 4. 今後の課題 |
| 2. 石神遺跡「攬乱」出土陶磁器類       | 5. おわりに  |
| 3. 石神遺跡「攬乱」出土陶磁器類の特徴と年代 |          |

### — 要 旨 —

石神遺跡の「攬乱」から出土した陶磁器類は詳細な出土状態は不明であるが、磁器碗などの特徴から明治前期と推定される。また、明治10年代前葉から中葉の墨書紀年銘を有する徳利も存在し、当該時期の重要な資料となる可能性が考えられる。そのため、ここに資料紹介を行い、良好な資料が少ない本県における近代陶磁器類研究の一助とするものである。

## 1. はじめに

太田市竜舞町に所在する石神遺跡は、平成24年度と25年度に発掘調査が行われ、平成27年に報告書が刊行されている（高井2015）。筆者も陶磁器に関する整理業務に関わったが、時間的な理由で「攢乱」出土近代陶磁器の掲載を見送らざるを得なかった。しかし、石神遺跡出土「攢乱」出土陶磁器は、明治前期の一括資料と考え得る様相、内容を有しており、ここに出土資料を紹介し、群馬県における近代陶磁器研究の一助とするものである。



第1図 石神遺跡位置図 五万分の一地形図「深谷」を使用

## 2. 石神遺跡「攢乱」出土陶磁器類

石神遺跡「攢乱」出土陶磁器は4—5区の東側道際の攢乱から出土したようである<sup>(1)</sup>。調査区の関係で攢乱形状や深さは不明で、その性格を推定することは困難な状態である（第2図）。4—5区の道路際「攢乱」から出土した陶磁器類は、出土状態から一括性が保証できる状態ではないが、以下に紹介する。

### 磁器小杯(1～4)

いずれも染付で2は外面に「寒山万...」の漢詩と思われる文字と山水文を描く。3は外面に李白「清平調詞三首 其三」の漢詩。高台内には1重圏線内に「成化年製」銘がある。4点共に染付は呉須の可能性がある。

### 磁器小碗(5・6)

5の染付は呉須であろう。6は外面が青磁釉、内面と高台内が透明釉である。焼成不良のため不明瞭であるが、クロム青磁ではないと考えられる。

### 磁器猪口(7～9)

7～9は同形、同文様の染付で高台内1重圏線内に不明銘がある。染付は酸化コバルトの可能性があり、口縁端部にも酸化コバルト？を塗る。そい物の一部であろう。

### 磁器碗(10～24)

10は赤絵で小ぶりの碗である。11～17は染付端反碗である。11、12は同形、同文様で底部内面は寿字文を施す。13の染付は呉須の可能性があり、底部内面周縁に1重圏線を巡らす。底部内面は欠損しており、底部文様は不明。14の口縁部内面文様は11、12と同様で、底部内面周縁には1重圏線を巡らす。欠損により底部文様は不明であるが、寿字の可能性が高い。15の染付は呉須である。底部内面は1重圏線内に不明文である。16、17は底部内面に寿字文を描く。17は釉にざらつきが認められ、二次被熱を受けている。13と15以外は酸化コバルトによる染付である。18～20は丸碗で18と20が酸化コバルトによる染付である。19は呉須による染付で焼継ぎが認められる。21は19の蓋である。22も丸碗の蓋と考えられ、染付は酸化コバルトであろう。23、24は平碗で23が酸化コバルトによる手描き、24が酸化コバルトによる型紙絵付けである。23の口縁部内面には1カ所箇文を描く。

### 陶器碗(25～27)

25は陶胎染付である。また、27の腰錆碗も焼成年代が江戸時代に遡る。26は焼成不良であるが、内面から口縁部外面に灰釉、外面口縁部以下から高台内に鉄釉を施している。瀬戸・美濃陶器である。末期の腰錆碗であろう。

### 磁器皿(28～31)

28は白磁寿文皿である。29、30は共に志田窯と推定される皿で呉須による染付である。両者ともに口錆を施し、30は蛇目凹形高台である。31の染付は酸化コバルトによるもので、30に比して高台径が小さい。口錆を施す。

### 陶器皿(32)

32は灰釉瀬戸・美濃陶器皿であり、焼成年代から考えて前代の混入品である可能性が高い。

### 磁器蓋物(33～35)

33は酸化コバルトによる手描き蓋物で小形鉢であろう。34、35は段重と推定され、34が呉須による手描き染付で35は酸化コバルトによる型紙絵付けである。

### 磁器鉢(36、37)

36は小片であるが、酸化コバルトによる染付鉢である。焼継ぎが認められる。37は呉須による染付鉢で、焼継ぎが認められる。釉にざらつきが認められ、二次被熱があると考えられる。

### 磁器盃台(38、39)

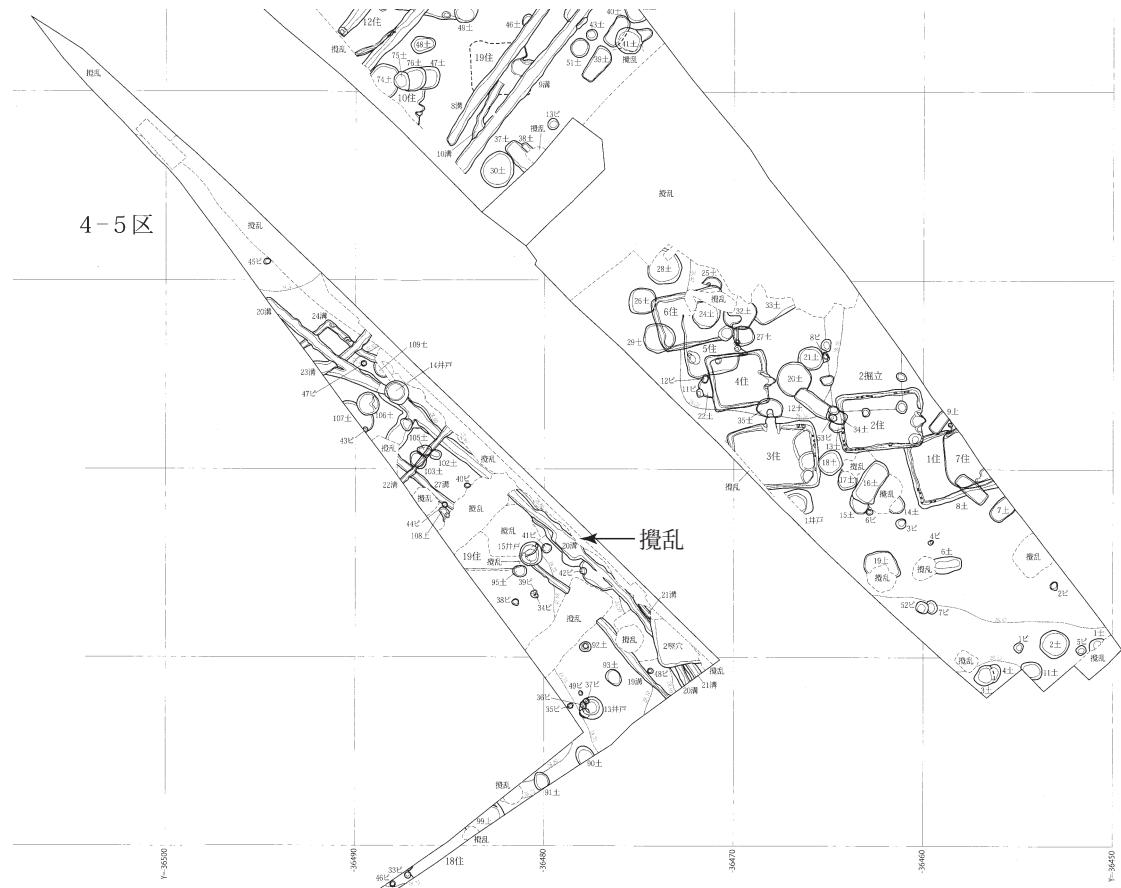
38は呉須による染付の花弁形盃台である。39は透かしを施した盃台で、口縁部の染付は呉須の可能性がある。

### 陶器ミニチュア(40)

40は灰釉の鳥の餌入れであろう。取っ手は一部が残存するのみである。瀬戸・美濃陶器。

### 陶器灯火具(41～43)

いずれも製作地不詳で、41は器壁がやや厚く内面から体部外面に灰釉を施す。42は内面から口縁部外面に灰釉



第2図 石神遺跡4—5区擾乱位置図 1/400 高井佳弘 編 2015より転載

を施す受皿である。43は灰釉の灯火受台である。

#### 磁器急須(44～46)

3点ともに酸化コバルトの可能性がある手書き染付である。45は腰部に屈曲部を有し、44は湾曲が強い。46は腰部に丸味を持つ。44には焼継ぎが認められる。46の底部外面無釉部には煤が付着する。

#### 陶器急須(47)

47は万古風の焼締陶器急須である。外面には「千秋」、「万古 陽楓軒 千秋」、「千秋不易」、「森氏」などの押印がある。

#### 陶器汁次(48)

48は瀬戸・美濃陶器と考えられる灰釉汁次である。注ぎ口は欠損する。底部外面は無釉。

#### 磁器徳利(49)

図示可能なものは1点のみである。3カ所に酸化コバルトによる横線を引き、手書きの不明銘を描く。主文様は欠損している可能性がある。

#### 陶器徳利(50～55)

50～53は製作地不詳の灰釉徳利である。51は残存部上端外面に青色釉を流す。外面は下部籠削り部分まで灰釉を施す。底部外面には「明治十年四長□(屋)第十二月」の墨書がある。やや焼成不良。52は肩部内面から体部下端籠削り部まで灰釉を施し、頸部から肩部に緑色釉を流

す。底部外面には「明治十三年四長沼(屋)第八月」の墨書がある。53は肩部内面内面から体部外面下端の籠削り部まで灰釉を施す。残存部に青釉などは認められないが、前2者と胎土の特徴などは似ている。底部外面に「明治十四年四□沼 □一月」と墨書される<sup>(2)</sup>。51～53の墨書は購入年月と推定され、明治10年代前葉から中葉の紀年銘として重要である。54は瀬戸・美濃窯製品と考えられる灰釉徳利である。頸部内面から高台内に灰釉を施し、体部外面下位以下の釉を拭う。底部は高台を有する。口縁部から頸部を打ち欠き、内面には鉄分の付着が多くお歯黒壺として使用されていた可能性がある。55は製作地不詳の柿色釉徳利である。

#### 陶器植木鉢(56)

製作地不詳で胎土は暗灰色である。口縁部内面から外面に黒色の鉄釉を施す。内面無釉部器表は茶色を呈する。

#### 陶器甕(57)

瀬戸・美濃の可能性がある甕で、柿色の鉄釉を施す。

#### 土器人形(58)

型押し成形。左腕に鯛を抱えているように見え、恵比寿と考えられる。

#### 土器皿(59～62)

いずれも轆轤は左回転であるが、体部と口縁部形状には違いが認められる。62は底部と体部に焼成後の穿孔が

認められる。

#### 土器釜形(63～65)

県内では類例を見ない器種で燻し焼成のため器表は黒色を呈する。轆轤整形で鈸貼り付け部以下は右回転籠削り。鈸は貼り付けである。

#### 土器十能(66)

轆轤成形の後に十能形に整えて、取っ手を貼り付ける。底部外面は右回転籠削り。燻し焼成で器表は黒色。

#### 土器香炉か(67)

平面は長方形、断面は逆台形を呈する。口縁部は内面側に屈曲する。底部には4カ所の脚を貼り付けると推定される。酸化焰焼成。

#### 陶器すり鉢(68)

堺すり鉢と考えられ、口縁部の器壁は厚く、内面の段差はほとんど消失している。口縁部下は籠削りで体部内面のすり目は底部に達しない。

#### 土器鉢形(69～73)

いずれも外面に回転施文具によると推定される飛鉋状の文様を施し、燻し焼成で黒色を呈する。体部から口縁部が内湾するタイプ(69～71)と体部が直線的な桶状を呈するタイプ(72、73)がある。

#### 土器火鉢(74)

燻し焼成により黒色を呈し、内湾する脚部を貼り付ける。口縁部は欠損。

#### 土器手炉か(75)

酸化気味の焼成でうすい黄灰色を呈する。底部は型による成形で外面に縮緬状の痕跡が残る。体部は轆轤か回転台整形で丁寧に仕上げられる。口縁部外面には唐草状文をスタンプし、文様間には焼成前の猪目状孔を2カ所開けている。口縁端部には段差があり、蓋が伴うと推定される。底部外面には脚の剥がれ痕があり、脚が3カ所貼り付けられていたと考えられる。内面に被熱痕や被熱による剥がれ等は認められない。

#### 土器竈(76)

基部を欠損するが、口縁部と焚き口は残存する。焚き口上部に低い鈸を貼り付け、上面を押さえて窪ませる。酸化焰焼成。内面を中心には被熱による黒変が認められる。

#### 土器焙烙(77～79)

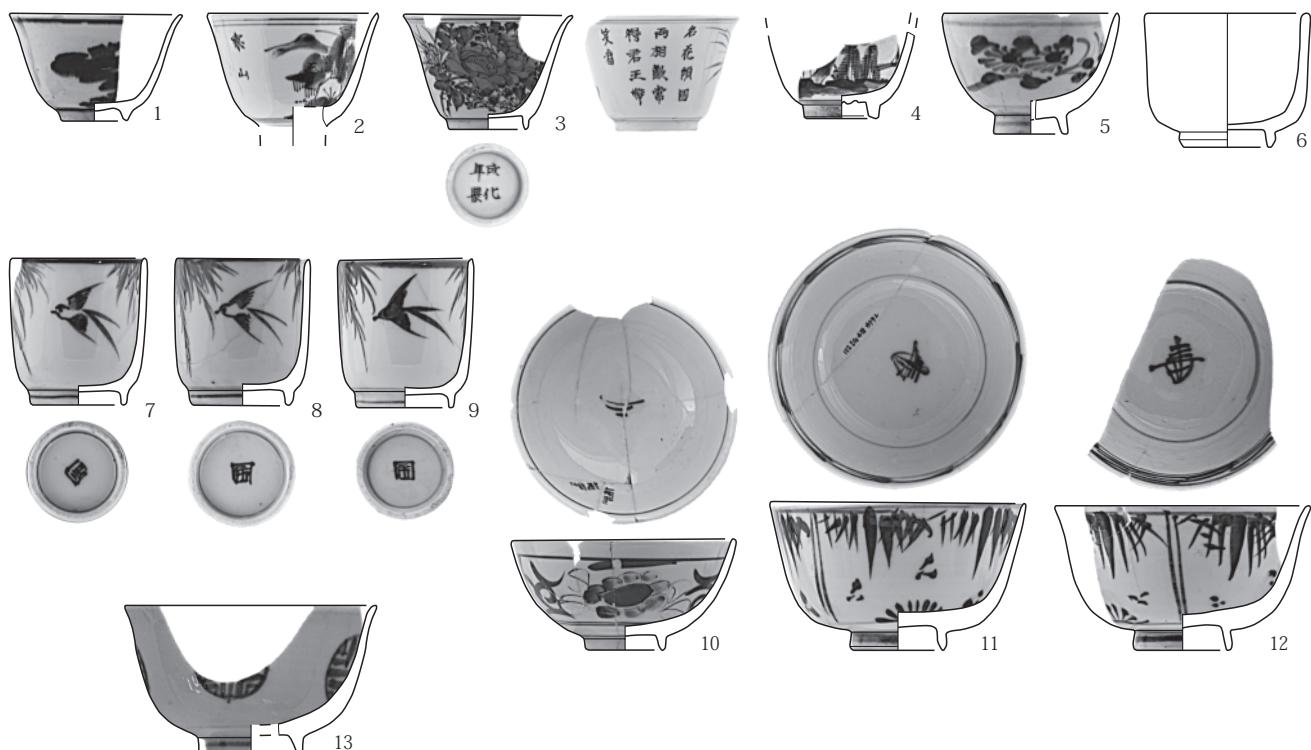
いずれも酸化焰焼成の丸底焙烙である。丸底ではあるが、中央部は平坦気味で周縁付近で屈曲して斜めに立ち上がる。底部と体部境外面は籠撫でにより面取りする。内耳は3カ所と考えられる。77の底部には補修孔が認められ、内面には針金のすれによると推定される溝状の窪みが観察される。酸化焰焼成。断面中央は灰白色で器表はにぶい黄橙色を呈する。器壁の厚い箇所は部分的に黒灰色を呈する。底部外面の痕跡は平底の焙烙と同様である。

#### 土器置輪(80、81)

小片のみの出土。内面の器表は煤が付着する。

#### 十能瓦(82、83)

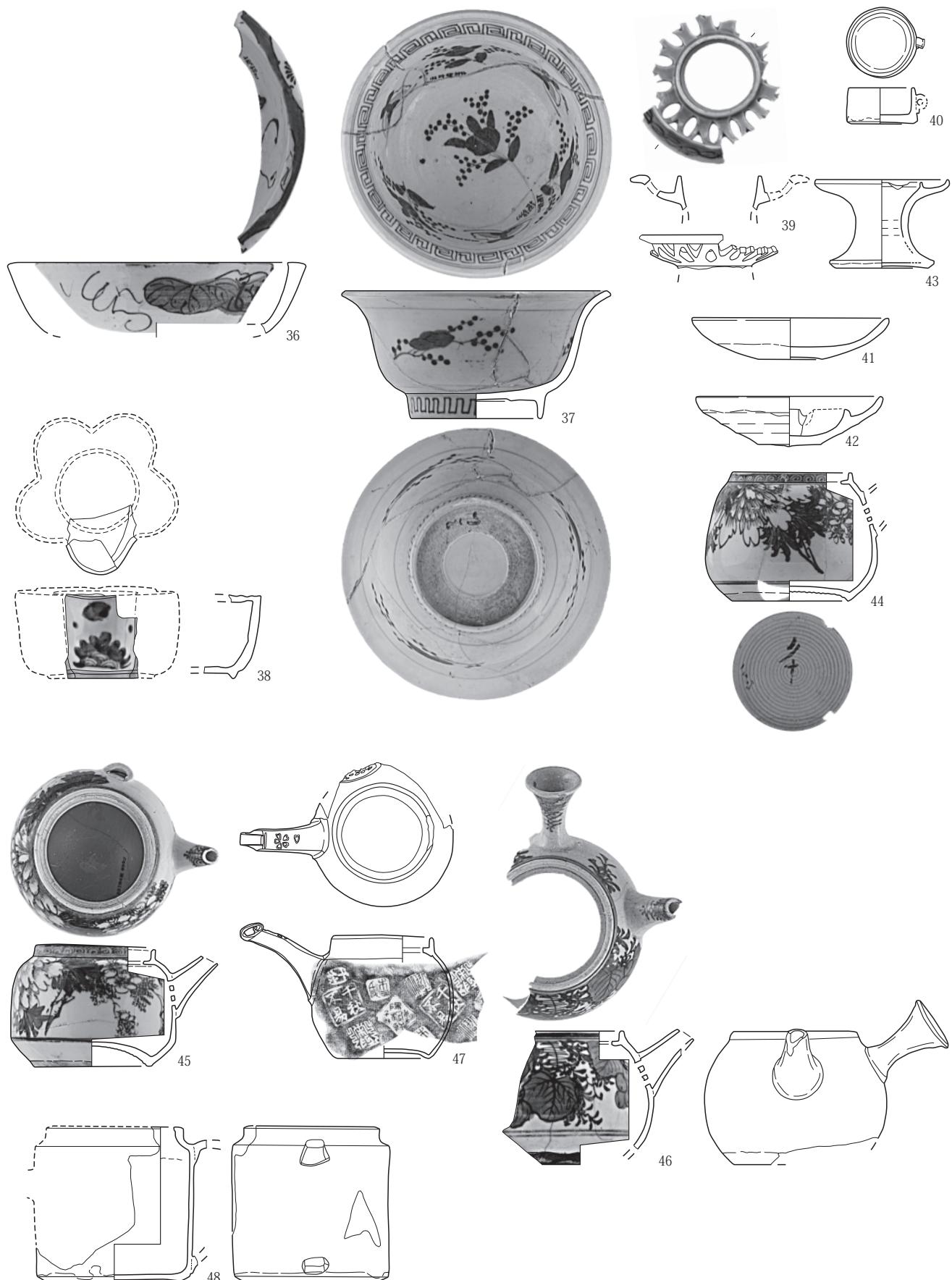
82は軒先瓦、83は十能瓦である。



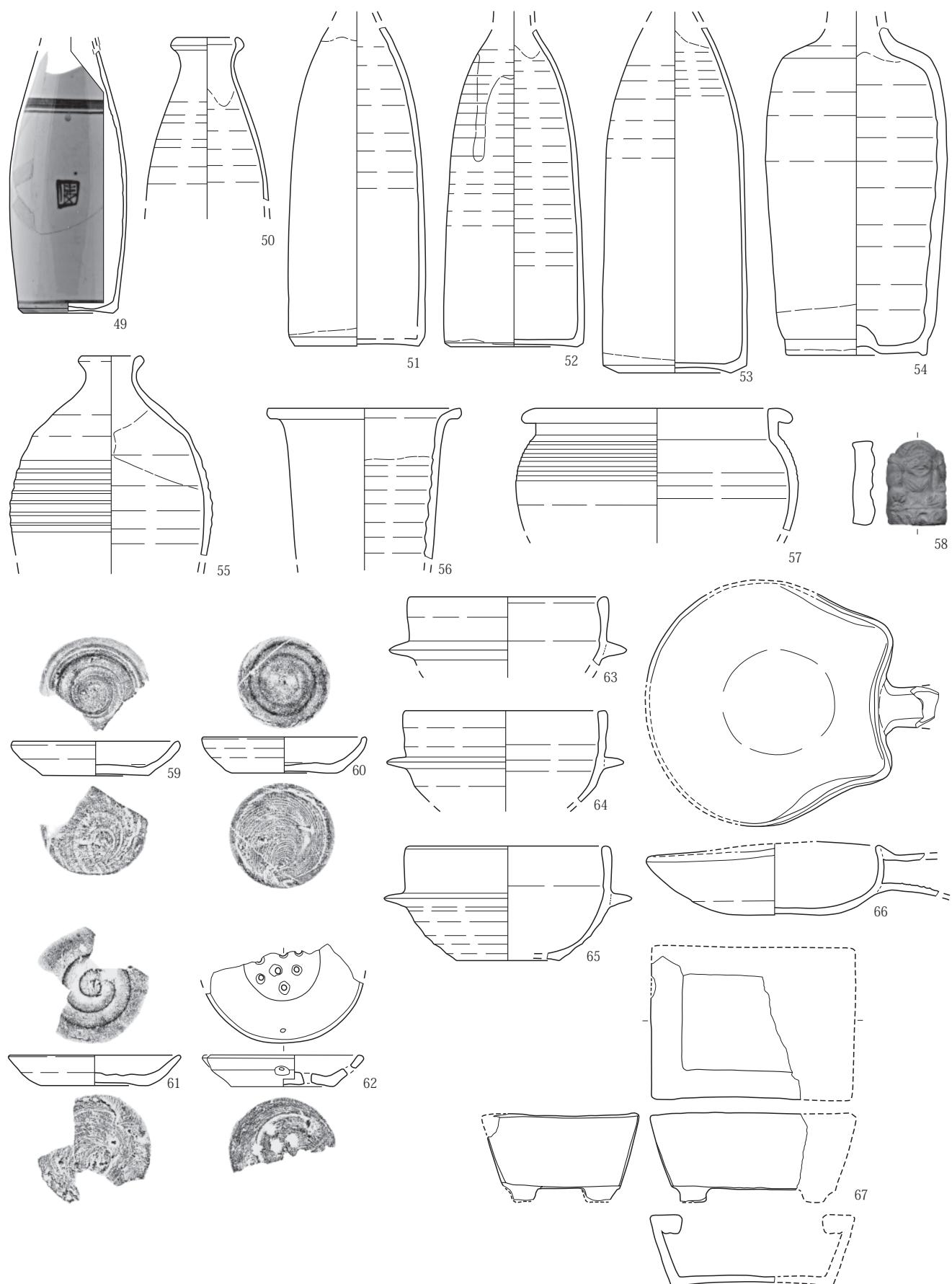
第3図 石神遺跡「攪乱」出土遺物(1) 1/3縮尺



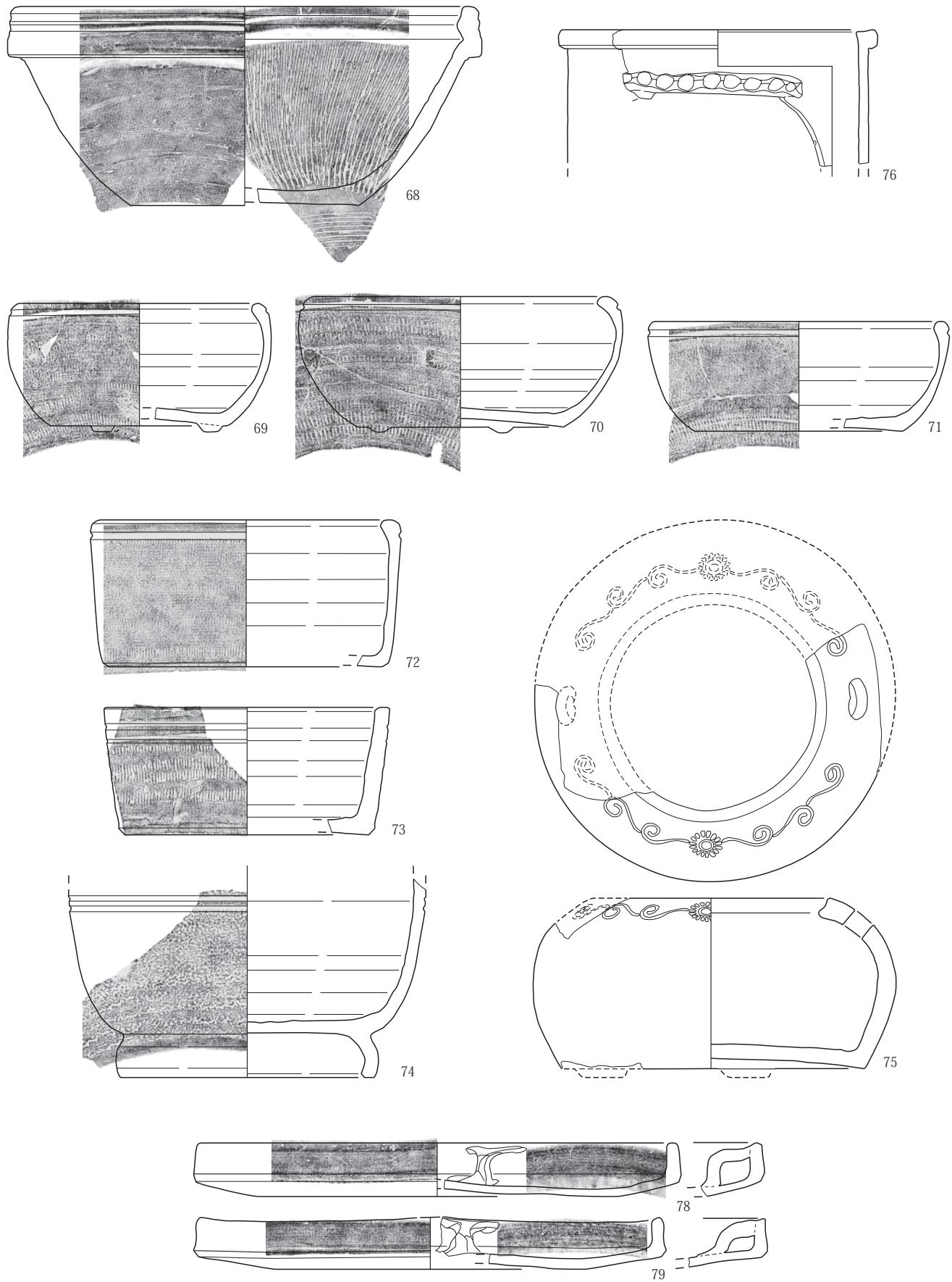
第4図 石神遺跡「攪乱」出土遺物(2) 1/3縮尺



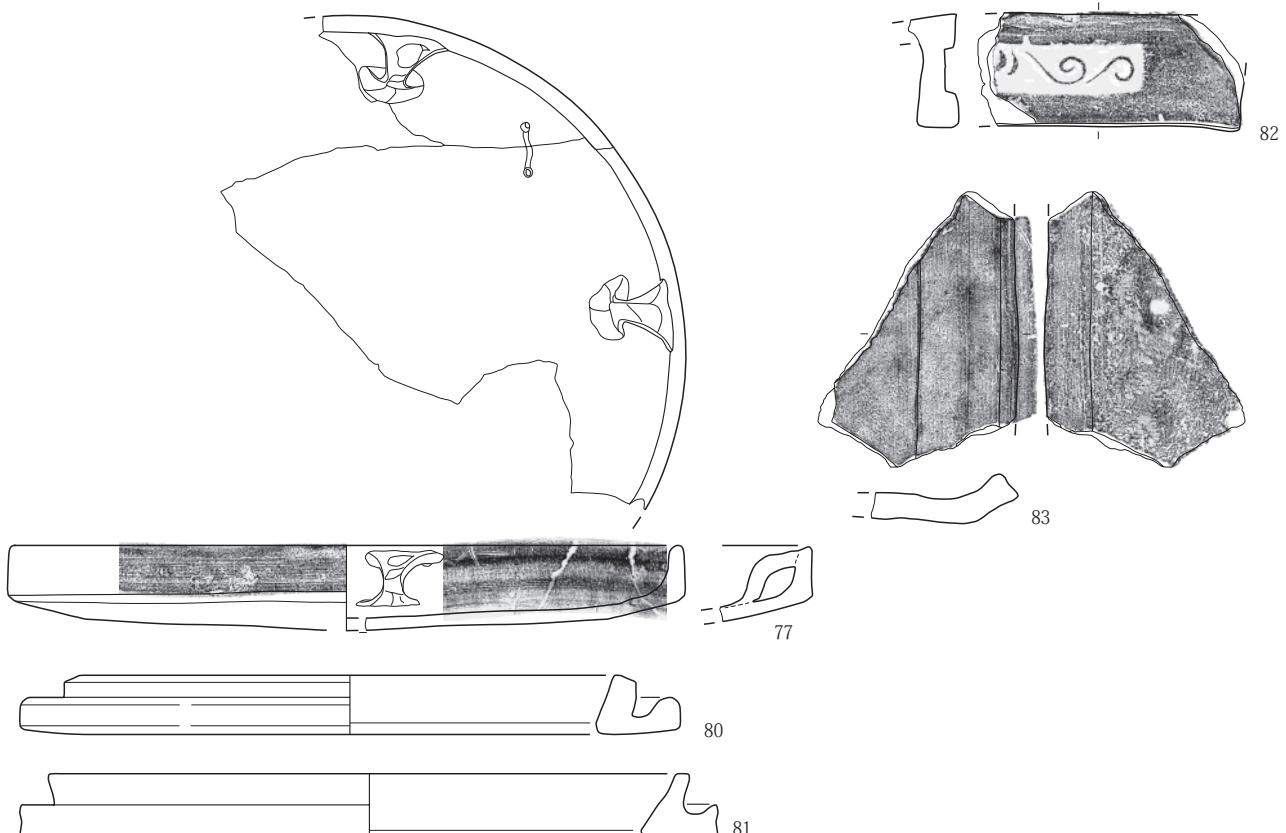
第5図 石神遺跡「攪乱」出土遺物(3) 1/3縮尺



第6図 石神遺跡「攪乱」出土遺物(4) 58が1/2、56・57・66・67が1/4、他は1/3縮尺



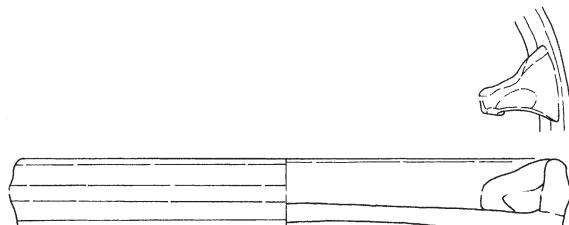
第7図 石神遺跡「攪乱」出土遺物(5) 76は1/6縮尺、他は1/4縮尺



第8図 石神遺跡「攬乱」出土遺物(6) 1/4縮尺



第9図 徳利紀年銘墨書 1/2縮尺



第10図 現代大沼焼き焙烙 (小林謙一 1990より転載)  
1/4縮尺

### 3. 石神遺跡「攬乱」出土陶磁器類の特徴と年代

石神遺跡「攬乱」出土陶磁器類では明治十年、明治十三年、明治十四年という購入年と考えられる紀年銘が墨書された徳利が注目される。紀年銘は明治十年代前葉であり、徳利底部に記された年代と他の陶磁器類から推

定される年代に矛盾が認められなければ、「攬乱」出土資料は一括資料として扱える可能性が高くなる。

消費地における近現代陶磁器、特に磁器中形碗を中心とした様相は長佐古真也氏によりフェーズIからIXに分類されている。フェーズIは「明治一桁年代後半～十年代中頃」と推定され、染付文様が手描きで端反形、丸形に加えて平形・平丸形が増加する段階であり、染付に酸化コバルトなどを多く使用することを特徴とする。フェーズIIは「明治十年代後半～二十年代前半頃」と推定され、丸形を中心に型紙絵付けが現れる段階とされている(長佐古 2007、2012)。

石神遺跡「攬乱」出土資料では磁器中形碗(11～20、23、24) 12点の内、端反形が7点、丸形が3点、平形が2点である。やや小ぶりな赤絵碗を含めると丸形が4点

となる。なお、19の丸形には蓋(21)が伴う。染付は酸化コバルトによる手描きを主体とし、1点のみ(24)酸化コバルトによる型紙絵付けが認められる。碗以外では段重と考えられる35も型紙絵付けである。なお、銅板転写やゴム印判、明らかなクロム青磁は非実測資料中にも認められず、フェーズIの終末頃からフェーズIIの初期段階に相当すると推定される。また、石神遺跡出土徳利の墨書紀年銘が明治十年から十四年でフェーズI終末頃からフェーズII初期頃に相当し、両者に年代の違いは認められないといえる。

以上、中形碗について見てきたが、それ以外の器種はどうであろうか。長佐古氏がフェーズIとして示した東京大学本郷構内の医学部付属病院地点A L 37-1(藤本強編1990)や紀尾井町遺跡S R 10(後藤宏樹編1988)出土資料でも染付磁器や焼締陶器の急須が出土しており、染付磁器急須の腰部は屈曲するか湾曲が強く、花卉文を大きく手描きし、口縁部外面にも文様を巡らすなど共通点が見いだせる。急須同様、煎茶器と考えられる漢詩を手描きした小杯や湯飲み形の磁器猪口も存在する。また、器高がやや高い寿文皿や志田窯と推定される呉須による染付皿や酸化コバルトによる染付皿の存在など共通点が認められる。従って、石神遺跡「攬乱」出土陶磁器類は、磁器中形碗様相から推定される年代と陶器徳利底部に墨書された紀年銘とが一致し、他器種を比較しても違和感がなく、より一括性が保証された状態での遺物が出土するまでの間、県内における明治十年代前葉から中葉にかけての一括資としてよいであろう。

#### 4. 今後の課題

石神遺跡「攬乱」出土陶磁器が明治十年代前葉から中葉の資料である可能性を示したが、共伴する土器類も同年代の可能性が高い。従って、皿や焙烙、竈、置輪といった多くの遺跡で出土する器種の年代的な定点となる。また、太田市や桐生市、大泉町など群馬県東部を中心に分布する十能瓦にも定点を示すことができたと考える。

群馬県では江戸時代の焙烙は燻し焼成の平底が一般的であり、消費地では明治頃には酸化焰焼成の丸底焙烙が一般的となることが漠然と捉えられていた程度であった。しかし、ここに紹介した資料では出土したすべての焙烙が酸化焰焼成の丸底であった。このことは、明治十年代前葉から中葉には消費地では丸底が一般的となっていたといえる。ただ、丸底とはいえ底部中央が平坦で中間付近で屈曲しており、平底と丸底の中間的ともとれる形態である。石神遺跡の所在地付近には、江戸時代には確実に生産を始めていた小泉焼きといわれる土器生産地があり、隣接する間之原遺跡では江戸時代の焙烙生産に伴って廃棄されたと推定される破片が大量に出土しており(宮下寛2015)、小泉焼きとの関係も重要な課題である。小泉焼きの現代焙烙がどのような形態であった

かは不明であるが、利根川の対岸に位置する深谷市大沼焼きの現代焙烙は平底である点が異なっている。焼成は「土師質製で、橙褐色」とされている。体部は直立し、体部外面下端には「弱いヘラケズリ」が施される(小林謙一1990)など石神遺跡出土焙烙と共に点も看取される。

今回は時間的な都合から小泉焼きとの関係に触ることはできなかった。また、群馬県東部では19世紀前葉頃には丸底焙烙が出現しているようであり(高島英之2015)、埼玉県や栃木県を含め丸底焙烙の出現時期や生産地についても今後の課題である(金古宏章1994)。

#### 5. おわりに

明治10年代中葉から後葉の石神遺跡「攬乱」出土資料を紹介したが、他の県内出土近代陶磁器や土器類に関する課題に触ることができなかった。これらの点については機会を改めたいと考えている。

#### 注

- (1) 調査担当の御教示による。
- (2) 墨書に関して群馬県立文書館のご協力を得た。

#### 引用・参考文献

- 金古宏章 1994『江戸近郊の内耳焙烙について』『江戸在地系土器の研究II』江戸在地系土器研究会  
 小林謙一 1990『大沼焼きの現代焙烙』『江戸在地軽度記研究会通信 No.14』江戸在地系土器研究会  
 後藤宏樹 編 1988『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告』千代田区紀尾井町遺跡調査会  
 高井佳弘 編 2015『石神遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 高島英之 編 2015『世良田環濠集落(2)』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 谷川章雄 編 1999『東京都墨田区横川一丁目遺跡』墨田区横川一丁目遺跡調査会  
 長佐古真也 2007『続・お茶碗考 一近代・現代の中形碗に飯碗を探るー』『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史14 (株)同成社  
 長佐古真也 2012『消費地から見た瀬戸・美濃窯 ～ごはん茶碗を中心に～』『瀬戸・美濃窯の近代 一生产と流通ー』シンポジウム資料 財団法人瀬戸市文化振興財団  
 中野泰裕 1994『19世紀の窯業 一伝統と西洋技術の受容ー』『科学史研究』第21巻 第2号 通巻第67号 化学史学会  
 藤本強 編 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室  
 宮下寛 編 2015『間之原遺跡 間之原東遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団